

平成23年10月12日

「この人に聞く」成熟社会と建築

華道家。華道家元池坊青年部代表

池坊 美佳



■ 「もったいない」という言葉はいつ頃からご自身の中に根付いたのですか。

顧みると私は幼い頃より「おはよう」「おやすみ」と同じように「もったいない」という言葉を口にしていたように思います。

それは私たちの家庭を支えている精神のひとつであったかもしれません。

あまりにも当たり前すぎて、人が空気存在をことさら気にしないように、私にとって、戦後生きてきた母にとって、そして家族全員にとって「もったいない」は日常生活そのものでした。

当然のごとく、そのもとで育てられた私も「もったいない」の精神は心の奥深くに根付いていました。

しかし、その「もったいない」をもう一度、新鮮な思いと衝撃的な感動で見つめ直すことになったのは、環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニアの副環境相であった故ワンガリ・マータイさんがニューヨークの国連本部で開催された国連婦人の地位向上委員会で演説した「MOTTAINAI」です。

ここで彼女は、来日した際に「もったいない」という言葉を知ったと話し、私たち日本人はもとより、女性たちによる世界的な「もったいない」キャンペーンへと広がったのです。

でも、「もったいない」は本来、先達の人たちから受け継がれてきた日本人の精神なのです。日本の民族信仰である古神道を源流とする神道では、散ってゆく花びらや吐息の一つ一つにまで命が宿っているとされ、森羅万象、全ての生きとし生けるものに命を感じ、慈しみや感謝の念をもって接してきました。

■ 日本の伝統文化「いけばな」のころとはどのようなことでしょうか。

私が向かい合っている日本の伝統文化の一つである「いけばな」も本来、六世紀の仏教の伝来と共に仏様に花を供えることから始まりました。

自然の中に神を見出し、人間の意志をはるかに超えたものの存在を感じていた原始社会の日本人は、自分の幸せや来世の安穩を聖なる

自然に対して祈りました。それが祈願とともに供花になり、生活様式に書院造りがつくられるとともに観賞花として、それぞれの時代とともに変化していきましたが、その精神を支えているのは全てのものに対する慈しみの感情なのです。

一木一草にも命を感じ、慈しみ、愛おしく思うことは全てのもを大切に受け入れることなのです。

私が代表を務めます池坊青年部では、現代社会において、自然界にある全てのもを慈しみ、愛おしんでいくこの池坊の感情をもう一度取り戻し日本人の原点、伝統文化の原点に戻ろうと考え活動しています。

■ 「もったいない」を具現化した作品づくりをされたとのことですが

マータイさんの「もったいない」の提言は、私たちの思想、考え方そのものであり、深く共感するとともに、いけばなとして「もったいない」の思想を具現化していこうと考えました。それが使用済み割り箸による超大作自由花でした。

私たちはいかに日々の生活の中でもったいないことを平気でしていることでしょうか。

例えば「割り箸」、私たちは当然のようにこれを使い、捨てています。それは大量生産、大量廃棄につながるのです。リデュース（ごみの減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再利用）の3Rに「もったいない」を加え、この運動として使用済み割り箸の活用を考えた時、素晴らしい作品が生まれました。三千人の人が自分の食器棚に残っていた使用済みの割り箸を持ち寄りました。

その数百二十万本。

家の限られた食器棚の片隅に眠っていた使用済みの割り箸。皆、口々に言いました。

「私たちはお食事をし終わってもすぐに割り箸がもったいなくて捨てられないのです。でもいずれは捨てないと使い道がないのですから。」と。でも今再び、一本一本の使用済み割り箸が多くの人々の創意と工夫により素晴らしい作品として出来上がっていく時、私はそこに新たな命を感じ、もしかしたら、割り箸も喜んでいるのではないかと思いました。

千人の人たちの力によって三日間を費やして完成した大きなその作品を写真でしかお見せできないのが残念ですが、ダイナミックでかつ繊細で、実物は見た人の心を揺さぶり、「これ、本当に割り箸なの？」の声も多く聞かれ、次にその変貌ぶりに芸術の魔術を感じ、見る人々に感動を与えることができたと思います。

いけばなは私たちの生活そのものであり、生き方そのものなのです。使用済み割り箸によって「もったいない」の精神を表現できたことに心から満足しています。